

精神疾患は「人格の病」に起因する

1、精神疾患の現状

- 1) 統合失調症は誤診が多い
- 2) 診断の問題は、うつ病でも存在する
- 3) 病気でもないのに「うつ病」と過剰診断された
- 4) 今後、「そううつ」の双極性障害が急増する
- 5) 精神科医の責任はますます重くなる

2、精神疾患は「人格の病」に起因する

- 1) 人格の病とは
- 2) 「信」の確立が、「人格の病」を改善する
- 3) 精神疾患から解放される「感性内観療法」

精神疾患は「人格の病」に起因する

1. 精神疾患の現状

平成 23 年 7 月『厚生労働省は、精神疾患を、がん、脳卒中、心臓病、糖尿病と並ぶ「5 大疾病」と位置づけ、重点対策を行うことを決めた。

諸外国に比べて遅れている精神医療の充実が期待できるが、課題も山積している。

同省の 2008 年の調査では、精神疾患の患者は 323 万にのぼり、237 万人の糖尿病、152 万人のがんなど他の 4 大病を大幅に上回った。』（2011 年 8 月 10 日読売新聞、医療情報部・佐藤光展）による記事

この記事の中に、「在宅医療が拡大すると医療チームが患者の生活環境を改善しやすくなる。早期に対応すれば、薬物療法だけでなく、考え方の偏りを修正する認知行動療法も活用できる」（国立精神・神経医療研究センターの大野裕・認知行動療法センター長）の言葉を引用し、5 大疾病に位置づけられた意義を語っている。

この記事の中で医療情報部・佐藤光展氏は、いくつかの課題を指摘している。

1) 統合失調症は誤診が多い

統合失調症では近年、誤診が多いことが専門家の間でも指摘されるようになった。特に、知的障害がないのに、円滑な対人関係を築けない「高機能広汎性発達障害」の人たちの特徴が、統合失調症の初期症状と誤解されてしまうのだ。

これらの人たちに統合失調症の薬を投与すると、少量でも精神状態が著しく悪化するケースが多い。長男を誤診された母親は「今のままで早期発見の対策を推し進めると、被害が増えかねない」と訴える。

2) 診断の問題はうつ病でも存在する

問題は、うつ病でも存在する。大阪市で開かれた日本うつ病学会総会で、講演した複数の精神科医が「抗うつ薬の販路拡大を目指す製薬会社のキャンペーンに影響され、診断が過剰になった側面がある」と語った。

病気ではないのにうつ病と過剰診断した結果、対人関係を原因とする一時的な落ち込みにまで抗うつ薬が処方され、休職期間をかえって長引かせた。

3) 病気でもないのに「うつ病」と過剰診断される

今回のうつ病学会総会で製薬会社がPRに最も力を入れたのは、そうとうつ状態を繰り返す「双極性障害」だった。

ある精神科医は、会場でこう皮肉った。
「製薬会社の活動で、今度は双極性障害の“患者”が急増するだろう」

4) 今後、「そううつ」の双極性障害が急増する

薬物治療についても、統合失調症患者に不適切な薬を大量に処方する多剤大量投薬の問題が残る。抗うつ薬の服用で、自殺衝動が表れる人がいることも問題になった。

5) 精神科医の責任は、ますます重くなる

今後、5大疾病の治療の一翼を担う精神科医の責任は、ますます重くなる。社会の信頼を得るためには、関連学会が精神医療の問題点を自ら洗い出し、専門医の実力を高めるための対策を早急に講じるべきだ。と結んでいる

私は、この記事を読んで薬物に依存させる今の精神医療に大いに疑問を感じないわけにはいかない。いまだに薬物に頼る精神科医の処方に、疑問を持たざるを得ない。

正直言って、処方としてこれで治るといふ決め手がないまま、かえって症状を長引かせ、重くしているケースが多いのではと、ますます疑念はつのるばかりである。

これでは精神科医自身が、うつ症状になってしまうことも、あながちムリもない、と頷いてしまうばかりである。それでは、精神科医に同情したくなるような気さえしてしまう。

2. 精神疾患は「人格の病」に起因する

1) 人格の病とは

人格の病とは、聞きなれない言葉である。ここでいう「人格の病」とは、感性論哲学の「人格論」を土台として、根拠づけられるところに、深い意味と価値がある。

人格の病とは、一言で表現すると、『感性の核である「信」が、健全に育てられていないか、なんらかの作用によって、「信」が破壊されている状態をいう。』

つまり人間として生きていく上で、最も大切な自分で自分を信ずることができない現代人が激増している。

自分で自分を信ずることが、自信となって何事にも前向きで積極果敢に、自分の人生を生き抜くという「感性の人間力」が湧いてくるようになる。

自信を持って人生を生き抜くためには、壊された「信」を改善して修復し、「信を確立する」作業が必要不可欠となる。その役割を果すのが「感性内観療法」である。

私は、自分自身が20代の前半、精神疾患（心身症、うつ、ノイローゼ）と出会い、病院・医者・薬に依存することなく、自分の生き方、考え方、生活習慣のまちがいを改善するという「自分療法」を実践研究して、「人格の病」を治療し、今現在の身心の健康があります。

自分で自分の病・症状を治癒した経過と体験を著わした「自分療法」に関する拙著を下記に紹介します。

①『人格は創り変えられる「自立した人生を開くー感性内観療法」』

著書 鬼木豊 産能大出版部刊

②『感動の実学と実践ー自分で自分を教育し、自分を救う！』

推薦 芳村思風（感性論哲学創立者）

著書 鬼木豊 自立感性塾刊

③『感性の欲求こと天性（生きる力）である』

著書 鬼木豊 （日本感性教育研究所）

④『内観教育のすすめー人生の宝庫・記録内観ノート』

著書 鬼木豊 （身心健康グループ代表）

2) 「信」の確立が「人格の病」を改善する

3) 精神疾患から解放される「感性内観療法」